



令和2年(2020年)第48週 2020年11月23日(月)~2020年11月29日(日)

熊本市 感染症発生動向調査 速報

厚生労働省
「インフルエンザ
(総合ページ)」



●インフルエンザに注意しましょう●

感染症発生動向調査で、熊本市の第48週(11月23日~11月29日)の定点医療機関あたりの患者報告数は、0.04人(定点数25ヶ所、患者報告数1人)と今シーズン初めての報告がありました。**こまめな手洗い、手を洗えない場合はアルコール消毒、咳エチケット(マスクの着用)**など感染予防に努めましょう。インフルエンザの予防接種は、「感染」を完全に阻止する効果はありませんが、インフルエンザの「発病」を一定程度予防することや、**発病後の重症化や死亡を予防する**ことに関しては、一定の効果があるとされています。

◆インフルエンザの予防接種について



インフルエンザにかかる時は、インフルエンザウイルスが口や鼻あるいは眼の粘膜から体の中に入ってくることから始まります。体の中に入ったウイルスは次に細胞に侵入して増殖します。この状態を「感染」といいますが、ワクチンはこれを完全に抑える働きはありません。ウイルスが増えると、数日の潜伏期間を経て、発熱やのどの痛みなどのインフルエンザの症状が出現します。この状態を「発病」といいます。インフルエンザワクチンには、この「発病」を抑える効果が一定程度認められていますが、麻しんや風しんワクチンで認められているような高い発病予防効果を期待することはできません。発病後、多くの方は1週間程度で回復しますが、中には肺炎や脳症等の重い合併症が現れ、入院治療を必要とする方や死亡される方もいます。これをインフルエンザの「重症化」といいます。特に基礎疾患のある方や高齢の方では重症化する可能性が高いと考えられています。**インフルエンザワクチンの最も大きな効果は、「重症化」を予防すること**です。国内の研究によれば、65歳以上の高齢者福祉施設に入所している高齢者については34~55%の「発病」を阻止し、82%の死亡を阻止する効果があったとされています。

今シーズンのインフルエンザワクチンの供給予定量(令和2年10月現在)は、約6,600万回分(約3,322万本)となります。昨年度の推計使用量は約2,825万本でした。なお、1回分は、健康成人の1人分の接種量に相当します。

期 間		2020年 47週		2020年 48週	
		11/16~11/22		11/23~11/29 (最新)	
疾患名	疾患の増減	報告数	定点当り	報告数	定点当り
インフルエンザ		0	0.00	1	0.04
RSウイルス感染症		0	0.00	0	0.00
咽頭結膜熱(プール熱)		6	0.38	3	0.19
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		6	0.38	19	1.19
感染性胃腸炎		42	2.63	35	2.19
水痘(みずぼうそう)		3	0.19	3	0.19
手足口病		12	0.75	14	0.88
伝染性紅斑(りんご病)		0	0.00	0	0.00
突発性発しん		10	0.63	15	0.94
ヘルパンギーナ		0	0.00	0	0.00
流行性耳下腺炎(おたふくかぜ)		2	0.13	0	0.00
急性出血性結膜炎		0	0.00	0	0.00
流行性角結膜炎(はやり目)		5	1.00	2	0.40
細菌性髄膜炎		0	0.00	1	0.20
無菌性髄膜炎		0	0.00	1	0.20
マイコプラズマ肺炎		1	0.20	0	0.00
クラミジア肺炎(オウム病を除く)		0	0.00	0	0.00
感染性胃腸炎(ロタウイルス)		0	0.00	0	0.00